

# ペルソナ4 前作主人公の後日譚

晴月

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

かつて世界の危機を救った高校生 有里湊 彼はニユクスを封印した後、封印の扉として現世から旅立った。のだが、それから二年後 彼はとある人物によって復活し、稲羽市へと移住するのだった。そこで始まる新たな生活と新しい戦いに身を投じていくこととなる。

目次

## プロローグ

〃影時間〃

深夜0時から約一時間程の間の時間に発生する特殊な時間。

それを終わらせるため、彼らは戦った。

そして最後の戦いにて、彼 〃有里湊〃は

大いなる存在 〃死〃という概念そのものである 〃ニユクス〃に  
対し、自身の命を掛けて封印を施した。

そして彼は封印の代償として命を落とした 〃筈だった 〃

「ん？」

彼が目を覚ましたとき、そこは彼がよく知る学校の屋上ではなかつた。

（ 〃確か、アイギスに膝枕をしてもらって 〃そのまま寝てしまつた筈 〃）

目の前には鼻の長い老人とその傍らに群青色の衣服を身に纏った女性が一人。

「ようこそ、ベルベットルームへ」

老人から聞き慣れた言葉を聞き、自分は今夢の中にいるのだという事とここはベルベットルームなのだと思座に悟った。

しかし、何時もならばエレベーターの中に居るはずなのに、どうい  
うわけか此処は車内のようなようだ。まるでリムジンのような縦長の車の  
車内だと思つた。

「お客様、お初にお目にかかります。私、今回からお客様をサポートさ  
せて頂きますマーガレットと申します。」

マーガレットと女性は名乗る。その姿を一瞥すると湊は既視感を  
感じた。

「もしかして、エリザベスの 〃 〃」

「はい。姉になります。」

なる程、と感じた既視感に納得する湊。

「 〃なんだか、僕の知っているベルベットルームとは違うみたいだけ

ど？」

「此処はお客様とは異なる『もう一人』のお客様。即ち、『ワイルド』の力を持つお方の心象風景を現しているのです。」

「僕と同じ、『ワイルド』の力を持つものが。」

「マーガレットのその一言で何処か納得した様子の湊。」

「そうだ、アイギス！」

「急いで元の世界へと戻ろうと出口を探す。」

「お客様、申し訳ありませんが此処から出ても元の場所へと戻ること  
は叶いません。」

「な、何で!？」

「どう尋ねるも、マーガレットは少し訝しげに顔を曇らせる。」

「お客様、申し訳ありませんがその質問にはお答え出来ません。しかし、少しならばお話しさせていただきます。」

「そう言っただけでマーガレットは手にしていた分厚い本を開き、語り始めた。」

「今から約二年前、具体的には2009年の2月頃、一人の少年が『死』という概念そのものと呼ばれたモノを封印した。」

「聞き覚えのある内容だった。正に自分が行ったことだからだ。」

「あれから二年経っている!? いや、それよりも今話したそれって『ニユクス』のこと。だとしたらこの話は。」

「しかし、その封印は自身の魂を素材とした封印でした。」

「(そうか。やっぱり僕は、あの時。)」

「マーガレットの言葉で自分は死んだのだと、いま自分が見ている光景はやはり夢なのだとそう思い込んだ。」

「しかし、そんな出来事に納得しなかった者がいました。」

「更に続けるマーガレット。」

「それが、私の妹、エリザベスでした。」

「!!」

「その言葉を聞いた瞬間、何故?と疑問符が浮かぶ。」

「自分は彼女に対して何もしていない。いや、違う。頼みを聞き入れ、願いを叶えただけの筈だ。それが何故命を救われるまでの出来事

になっっているのだろう。と、湊は思考の渦に飲まれながらもそう考えるが答えは出ない。

「妹は、僅か二年でお客様の魂を見付け出し封印から解き放つたのです。そして、今に至るといふ訳でございます。」

「なる程。」

と、一言漏らすややはりエリザベスの考えが自分には分からなかった。

そこまでされるようなことをした覚えがないからである。

「それで、僕はこれからどうすれば？もう、仲間たちの元へは戻れないだろうし。」

そう湊が呟くと、マーガレットは

「ご心配には及びません。」

と告げると湊の制服右ポケットを指差す。

すると、指差されたポケットから蒼白く光り輝く鍵が現れ、宙に浮かぶ。

「これって。」

「お客様がかつて使って居られた『契約書の鍵』で御座います。これからも此処に来て頂けるよう、手配致しますのでそのままお使い下さいませ。」

マーガレットがそう言うと、鍵はそのまま右ポケットへと収まった。

「分かった。でも、」

これからの生活について訪ねようとした時、

「お客様、申し訳御座いませんがそろそろ目覚めの時のようですよ。なあに、ご心配めされるな。目覚めた時には既に新たな舞台へと上がっているのですから。」

「!？」

どういう意味かを訪ねようとした所出るから湊ノエル意識は闇の中へと落ちていったのだった。

「。」

目覚めるとそこは、とあるマンションの一室であった。

「学生寮・って訳ではなさそうだ。」

周囲を見渡し、そう呟くとベッドから身体を起こす。

すると目の前に置かれていたテーブルの上に書き置きと一つの茶封筒が置かれていた。

「手紙かな？」

書き置きには、これから生活していく上で約一ヶ月程の生活費を支給することと新たな学校へと編入するため制服を用意したことが書き留められていた。

「なる程、〃八十神高校〃か。」

次に茶封筒の中身を確認するも、

「思ってたよりも少ないな。」

どうやら本当に約一ヶ月分しか用意されていないようだった為、バイトを探さなければならぬと思うのだった。

こうして、世界の危機を救った高校生 有里 湊は新しく新生活を始めるのだった。